



小特集④

パイロット焼殺映像の衝撃 —ヨルダンとイスラム宗教界の反応—

2月1日、ジャーナリストの後藤健二さんを殺害したとする映像が「イスラム国」によって公開された。ヨルダンでは2日、在ヨルダン日本大使館前で集会が開かれ、「テロと過激派を拒否する」「ヨルダン人と日本人は共にある」などと書かれたメッセージを掲げた市民ら約100人がろうそくを灯した。「私たちはケンジ・ゴトウ、私たちはムアズ」と声をあげる人や、「イスラム国」に拘束されたムアズ・カサースベ中尉(26)の写真を掲げた少女もみられた(日経・タ2/3ほか)。

その後インターネットに公開されたカサースベ中尉の殺害映像は、その残虐さで国際社会の非難を浴びただけでなく、イスラム教徒、イスラム法学者の間で逸脱行為として強く批判された。以下では、カサースベ中尉の拘束以降の経緯とヨルダン世論およびイスラム宗教界の議論の展開を整理する。

1. ムアズ・カサースベ中尉の拘束

12月24日、ヨルダン人パイロットがシリア北部の「イスラム国」支配地域を空爆中に墜落し、「イスラム国」に拘束された。パイロットはムアズ・カサースベ中尉。「イスラム国」は機関誌『ダービク』に「十字軍パイロットの捕虜」と題した中尉のインタビュー記事を掲載した。記事は米国主導の連合軍を「十字軍」と呼び、「十字軍」のために出撃した中尉を「背教者」とみなすものだった。「『イスラム国』はあなたに何をやるか知っているか」との質問に、中尉は「私を殺害するだろう」と返答した(読売1/31ほか)。

カサースベ中尉はヨルダン中部のカラク出身で、遊牧民部族(ベドウィン)の有力な家系に属す。人口の約3割を占める遊牧民はヨルダンの象徴とされ、その意向は政治的にも影

響力を持ってきた。首都アンマンではカサースベ中尉の親族ら約100人が連日集会を開き、国会議員らも中尉の救出を政府に働きかけた。中尉の父親も、拘束が判明した直後からベドウィンの伝統服に身を包み、メディアで救出を訴えた。この中で中尉がコーランを暗唱するなど敬虔なイスラム教徒であること、2014年7月に結婚したばかりだったことなどが明かされ、国民の同情を集めた。ツイッターやフェイスブックで拡散された中尉の拘束時の様子も、国民の憤りを募らせたとされる（読売1/31ほか）。空軍パイロットは軍の中でもエリートで、軍の最高司令官でもあるアブドラ国王は中尉を「ヨルダンの息子」と呼び、救出を国家の最優先事項とした（東京1/20ほか）。

ヨルダンの中東諸国の中でも欧米と緊密な関係にあり、1994年にエジプトに続いてイスラエルと平和条約を結んでいる。ヨルダン王室は預言者ムハンマドの血統を引き、1920年代までイスラム教の聖地メッカの太守を務めてきたハシム家。アラブ有力紙などは、国王が「息子」として保護する中尉を無視し、後藤さんの解放交渉に拘ること、国王の宗教的権威を失墜させようとする「イスラム国」の狙いがあると指摘した（東京1/30ほか）。

2. カサースベ中尉の殺害映像

2月4日未明（現地時間では3日午後7時）、「イスラム国」はカサースベ中尉を殺害したとする映像を動画サイトに投稿した。映像は22分余りで、オレンジ色の囚人服を着たカサースベ中尉が檻の中で火をつけられ、死亡する内容。空爆参加国であるヨルダンをアラビア語で激しく非難し、連合国による空爆の悲惨さを示すように、負傷した戦闘員や泣き叫ぶ子どもの姿、がれきの中から運び出される遺体などを映した場面、複数のヨルダン人パイロットの写真、氏名、住所などを公開して殺害を呼びかける場面、またカサースベ中尉がパイロットの親に「空爆に息子たちを参加させるな」と警告する場面も含まれていた（読売・夕2/3ほか）。

映像公開から約2時間後、「ISに死を」と書かれた紙を掲げて抗議する市民約200人が集会を開いた。「復讐だ!」「サジダ（サジダ・リシャウィ死刑囚のこと）を燃やせ!」と声を上げる参加者もいたという。ヨルダン政府は映像公開直後にサジダ・リシャウィ死刑囚を含む3人の死刑を執行し、軍事的な報復を宣言した（毎日・夕2/4ほか）。

カサースベ中尉の出身地カラクでは、2月4日正午より追悼の礼拝が開かれ、2月5日にはアブドラ国王が家族の元を訪れて弔意を示した（朝日2/5ほか）。

3. 殺害方法に対する宗教界の反応

イスラム教徒にとって、火で焼かれるのは神のみが科すことのできる罰で、地獄で不信心者が受けるものとされる。スンニ派の最高権威とされるエジプトのアズハル大学総長のアフマド・タイブ師は2月4日、「アッラー以外の何人も火刑を科すことはできない。イスラム教からの逸脱だ」との声明を発表、「イスラム国」の行為こそがイスラム法に基づく罰を受けるべきだと非難した。カタールに亡命中の著名なイスラム法学者ユースフ・カラダーウィー師も、「この過激派はイスラム教を代表しておらず、行動は常に害悪だ」と強く批判した。「死後の復活」によりアッラーの審判を受けるとされるイスラム教では、死体の損壊が厳しく戒められており、火葬も行われない（読売2/6ほか）。イスラム教徒が忌み嫌う方法を用いての殺害映像を公開したことには、空爆を行っている連合国の中でも特に、アラブ諸国に向けた脅しの意図があったとみられている（読売2/5ほか）。

「イスラム国」は火を使った殺害について、教義に基づいたものだと主張した。2月4日、「イスラム国」ラジオ放送はカサースベ中尉を殺害したとするニュースを伝え、中尉を生きのまま焼き殺した理由について、空爆によりイスラム教徒を殺したからだと説明した。同害報復の観点から殺害方法を正当化する説明だ(朝日2/5ほか)。また、1月20日頃と2月3日頃にそれぞれ、「背教者を火あぶりとする事は認められている」とする文書をファトワ(高位のイスラム法学者が示す宗教意見)としてシリア北部のラッカで配布した。文書はムハンマドの言行録にある「火を使って苦痛を与えるのは神のみだ」という一節について、『真に罰を与えるのは神のみだ』という意味だとし、さらに14～15世紀の高名なイスラム法学者の著述のなかに「ムハンマドの側近が背教者を焼き殺した事例」が示されているとするもの。支配地域のモスクでも同様の説明を行っているという(読売2/6ほか)。

これに対し、アズハル大学の高位法学者アシュラフ・サード・アズハリ師は、背教者を焼き殺したという伝承は信憑性が薄いものだと反論し、殺害が「イスラム法が定める捕虜の扱いにも反する」と批判した。エジプトのファトワ庁も、この伝承について「信頼できるものではない」と声明を出している。「イスラム国」内部でも殺害方法に異論が出たとされる。サウジアラビア出身の宗教家は、パイロットを殺害した者を「禁忌を犯した者」として裁判にかけべきだと主張したが、この言動がファトワを発行した(「イスラム国」の)「宗教庁」を侮蔑したとみなされ、拘束されたという(毎日2/12ほか)。

日本メディアはあまり伝えていないが、過激派組織もタイイブ師の発言をタグ付けするなどして、「イスラム国」非難に同調した。「アラビア半島のアルカイダ」はその一つだ。また、ヨルダンでも2月6日、超保守派のイスラム法学者アブムハンマド・マクディーシ師が、中尉の殺害映像を「狂気の行為」と非難した。同師は「イスラム国」の前身組織「イラクのアルカイダ」の指導者ザルカウィ容疑者の「師」とされる人物で、過激派へも影響力を持つ。2014年10月にテロ扇動容疑で逮捕されていたが、カサースベ中尉および後藤さんの解放交渉で仲介役として協力し、2月5日に釈放されていた(読売2/7ほか)。

4. 余波：「外国の戦争」からヨルダンの戦争へ

2月5日、ヨルダン空軍の戦闘機数十機が、カサースベ中尉殺害への報復として「イスラム国」拠点を30回にわたって空爆した。国営テレビによると、新たな作戦名は中尉の名前に因んで「ムアズ」と命名され、空爆を終えた戦闘機は中尉の出身地周辺の空を飛行したという。空爆前に兵士らがミサイルに「イスラムの敵へ」と書き込む様子も伝えられた(朝日・タ2/6)。カサースベ中尉殺害による空爆参加国の動揺を抑えるため、米軍は空爆作戦中に墜落した場合に備えて前線に近いイラク北部に捜索救難部隊を配備した(東京・タ2/6)。

対「イスラム国」の空爆参加を「外国の戦争」として疑問視する声もあったヨルダン世論は、中尉殺害を受けて空爆支持に傾いたとされる(朝日2/5ほか)。首都アンマンでは2月6日、金曜礼拝の後で数千人規模の行進が行われ、中尉を悼む参加者らは中尉の写真やヨルダン国旗を手に、「怒りを表すためにここに来た」「われわれがヨルダンだ」などと表明、「イスラム国」への報復を求めた(東京2/7)。「もはやこれはヨルダンと『イスラム国』の戦争だ」との声が、厭戦気分や中尉救出に失敗した国王批判を掻き消している状況だ(産経2/5)。

[文責：光成歩]